

〈研究・教育の周辺〉

戦前の長崎を訪れた著名人

－ 県立長崎図書館の『芳名録』から

谷澤 毅*

旧長崎県立長崎図書館の『芳名録』の内容が一部インターネットで公開されている（長崎県立・大村市立一体型図書館（ミライ on 図書館）のホームページ）。『芳名録』は自筆の訪問の記録なので、それを見れば、いつ誰が長崎に滞在していたのかがわかる。さらに言えば、この『芳名録』にはじつに多くの名士が記帳者として登場する。それゆえ、いかなる著名人がいつ長崎に滞在していたか、その一端を知るための資料ともなる。

いくつか名前を挙げてみよう。例えば、芥川龍之介（来館日は1919年5月6日、以下同じ）、菊池寛（1919年5月8日）、斎藤茂吉（1919年8月13日）については、説明は不要だろう。文学関係者では、ほかにも戦前日本を代表するジャーナリスト、言論人であった徳富蘇峰（1921年5月16日）や日本の近代文学、演劇のパイオニアとなった坪内逍遙（1922年10月26日）、作家の吉屋信子（1923年4月24日、1937年9月22日）や歌人で第一回文化勲章受章者の佐々木信綱（1929年10月6日、1938年11月24日）など、学者では、シーボルトについての大著がある医学者の呉秀三（1924年4月7日）、歴史学者として有名な黒板勝美（1920年8月8日）や幸田成友（1927年3月23日）、物理学者でアインシュタインとの面会も果たした桑木彥雄（あやお）

（1920年3月19日）などが登場する。壱岐出身で「電力の鬼」と讃えられた財界人松永安左衛門（1921年6月29日）、後に内閣総理大臣となった外交官広田弘毅（1927年1月3日）、軍人にして歴史学者でもあったイギリスのチャールズ・ラルフ・ボクザー（1930年8月10日）もこの『芳名録』に記帳している。

江戸時代を通じて長崎はヨーロッパに開かれた日本の唯一の窓口であった。海外の文化・文物により培われた異国情緒は明治期以降も受け継がれ、近代、とくに1920年代から30年代にかけての長崎は、全国的な旅行ブームを背景としてエキゾチックな雰囲気をも希求する観光客を数多く集めた。なかでも、学術・文化的な面から長崎に関心を抱く人々が訪れた先が数多くの文献、歴史資料を所蔵していた県立長崎図書館であった。

さて、以下ではこの『芳名録』に名を残した、すなわち長崎を訪問した名士のなかから世間的にはさほど知られていないと思われる学術関係者を数名紹介してみることにはしたい。

まず取り上げるのは、考古学者の浜田耕作（1919年3月）である。「日本の考古学の父」と讃えられた浜田耕作（濱田青陵：1881～1938年）は、数多くの専門研究と『通論考古学』や「東亜考古学研究」などの研究書や教科書の執

*長崎県立大学東アジア研究所長、経営学部教授

筆を通じてわが国考古学の研究水準の向上に貢献した。京都帝大の総長を任され、学界の指導的立場にあった。遊び心の持ち主でもあり、随筆や紀行文を著し絵筆を握ることもあった。1926年、スウェーデン皇太子グスタフ六世アドルフが来日した際、学問好きの皇太子は大分・臼杵にまで足を運んで石仏群を見学したが、この臼杵訪問のきっかけは浜田の豊後摩崖仏に関する著作が与えたと言われている。訪問当日は説明役を務め、後日スウェーデンから叙勲された。

わが国英語・英文学研究の祖とされる市河三喜(1886～1970年)も長崎図書館の訪問者であった(1936年12月24日)。『英文法研究』や『英語学辞典』など英語・英文学関係者の指針となる専門書を出版し、日本英文学会、日本シェークスピア協会の初代会長に就任した。英語だけでなくヨーロッパ諸語、古語にも通じ、英学生のためのラテン・ギリシャ語の入門書も著している。幼少時より昆虫や植物の採集を好んだ博物学者でもあり、『私の博物誌』などの随筆でも知られる。東京帝大教授、1939年学士院会員、1959年文化功労者。

社会科学の領域からも選んでおきたい。社会経済史学の発展に貢献した野村兼太郎(1896～1960年)は、1934年11月7日に弟子の高村象平とともに長崎図書館を訪れた。『英国資本主義の成立過程』などのヨーロッパ経済史に関する著作に加えて『村明細帳の研究』、『徳川時代の経済思想』など日本経済史・経済思想史に関する数多くの著書を著したほか、歴史資料の収集にも力を入れた。慶応義塾大学教授、社会経済史学会代表理事、1950年学士院会員。なお、同行した弟子の高村象平(1905～1989年)も経済史研究者として名を成し、わが国におけるドイツ・ハンザ(ハンザ同盟)史研究の先駆者となっ

た。慶応義塾大学塾長、中央教育審議会会長を務め、やはり学士院会員であった。

さて、以上で紹介した四名の学者は、じつは長崎に在住した一学者とみな知己の間柄にあった人物である。その学者の名は武藤長蔵という。さらに言えば、先に挙げた芥川龍之介以下の著名人も、すべてこの武藤長蔵と交流した者ばかりを選んで列挙したのであった。

武藤長蔵(1881～1942年)は、戦前の長崎で活躍した経済学者、歴史学者であり長崎高等商業学校(現在の長崎大学経済学部)の教授を務めた。研究の幅はたいへん広く、商業学をベースに歴史学、海外交流史などを手掛け、人文・社会科学の諸分野へと広がりを見せた。長崎学の大家としても知られ、県立長崎図書館の初代館長永山時英、『長崎ぶらぶら節』で有名になった郷土史家古賀十二郎とともに「長崎学の三羽鳥」と呼ばれた。研究の手法は独特で、無数の文献・資料にもとづく事物起源的な考証を得意とし、その手法は後世「ムトウイズム」と呼ばれた。文献・資料による博捜を支えたのは彼により蒐集された膨大な蔵書である。武藤には、家計のことなどは顧みない書痴としての一面があった。

その一方で、武藤は大変な社交家でもあった。高等教育機関の研究者として上述の四名のようなアカデミズムの世界の学者と交流があったのはもちろん、在野の学者、文化人も広く交友関係を取り結んでいった。よく知られているのは斎藤茂吉との交流であろう。長崎医学専門学校教授として長崎滞在の経験がある茂吉との交流は生涯続き、茂吉が武藤に捧げた歌がいくつか知られる。芥川龍之介と菊池寛が長崎を訪問した時に、郷土の名士永見徳太郎邸で武藤も加わって撮影された写真は今もよく目にする機会がある。

武藤長蔵は、「訪問病」があるとうわさされるほど遠来の著名人の応接に熱心であった。長崎の「私設大使」として彼らを市内外の名所・旧跡に案内した。その案内先の一つに県立長崎図書館があった。

なお、同図書館の『芳名録』は以下で公開されている。

<https://miraionlibrary.jp/local/name/>